

## 六月祓 又をかし

渡 部 和 雄

一  
徒然草第十九段「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。」の中に「六月祓又をかし。」とあるのは周知のところである。

ここは、

五月、あやめふく比、早苗とるころ、水鶏のたたくなど、心ばそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蛟遭火ふすぶるもあはれなり。

につづいて△六月祓▽がでてくるから、民間行事のその方向に推察して誤りはないだろう。古典文学全集で「夕方、川原で行なわれ、邪気を払うものとされた。」というのが、大凡は正しいと思われる。

『祝詞』の中の「六月晦大祓」はもっとと莊大で、勿論宮廷行事の面を表に出している。

……かく聞こし食してば、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下四方の国には、罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕べの御霧を朝風・夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を、舳解き放ち艫解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、焼鎌の敏鎌を以ちて打ち掃ふ事の如く、遣る罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、高山・短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ

六月祓 又をかし（渡部）

速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会に坐す速開津咩と云ふ神、持ちかか吞みてむ。かくかか吞みてば、氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神、根の国・底の国に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の国・底の国に坐す速佐須良比咩と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。……

と、神事もつまりは△言葉の性質▽である面を如実に示している。宮廷行事もこの言葉の呪性に基礎を置いているのであろう。平安朝宮廷貴族も右様な△六月祓▽を経験していたのである。

「六月祓又をかし」という分化した感覚とは違う。

「をかし」の文学である枕草子に△六月祓▽がとり上げられることはなかった。

いみじう心づきなきもの祭・禊など、すべて、男の物見るに、ただ一人乗りて見るこそあれ。

とあるが、特に六月祓といっているわけではない。

故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大祓といふことにて、……

は、古典文学全集の頭注に「六月と十二月の晦日に行われる大祓。禊をして罪をはらい清めた。諸官朱雀門に集まって行われたという。」からには、六月祓Ⅱをかしの性質はまだ生まれていない。

また清少納言と「麻」の關係にしても、麻に情趣を見つける様子はない。

朝顔の露おちぬさきに文かかむと、道の程も心もとなく、「麻生の下草」など、くちずさみつ、……

と出てくる麻生は

壬二集 五十首和歌 夏

桜麻のをふの下露いかならむ御襖になりぬ六月の空

古今六帖 六

桜麻の麻生の下草露しあらば明してゆかむ親は知るとも

などあるが、「下草」は後者によるう。ということは「御襖」と「桜麻の麻生」の關係をつける可能性は枕草子にはなかったということがある。

ところが和泉式部集には次のような歌がある。

おもふことみなつきねとてあさのはをきりにきりてもはらひつるかな

国歌大観では、和泉式部集第一 春(四〇二三七～五六) 夏(五七～七五) 秋(七六～九五) 冬(九六～三一五)……と編集されている、その夏の最後(四〇二七五)に

思事皆つきねとて麻の葉を切りに切りても払ひつる哉とある。そして、

和泉式部集第二 夏(の最後四〇五五七)に、

清きせに名越の祓へしつるより八百万代は神の随に

とある。右の二首の歌から八月祓は、抒情詩の世界に、「清きせに」「麻の葉を切りに切りて」払うものであったことが推測される。六月の晦日の伝統は四季立ての歌集にも持ち来たされ、「秋」の直前に位置している。しかしまた、△具体的△には、

「麻の葉を切りに切りても」だけでは、六月祓は姿を隠してくることになった。麻の葉を切るとはどんなことが判らないのである。

右の歌は後拾遺和歌集 誹諧歌に、

一二〇六 水無月のはらへをよみ侍りける 和泉式部

思ふ事皆つきねとて麻の葉をきりにきりても祓へつる哉

と出ている。「麻の葉をきりにきりても」の行動・表現に誹諧性を見たのであろう。△八月祓△の位置、夏の終り、秋の前を固定的に獲得してはいない。いわば祓へにも人間の接し方で色んな面があるわけである。さてその後拾遺集は二十巻、次の様に編集される。

春上 一～一二七

春下 一二八～一六四

夏 一六八～二三四

秋上 二三五～三三四

秋下 三三五～三七六

冬 三七七～四二四

賀 四二五～四六〇

別 四六一～四九九

羈旅 五〇〇～五三五

哀傷 五三六～六三九

恋一 六四〇～六六三

恋二 六六四～七一四

恋三 七一一～七六九

恋四 七七〇～八三二

雑一 八三三～九〇三

雑二 九〇四〓九七一  
 雑三 九七二〓一〇四一  
 雑四 一〇四二〓一〇九九  
 雑五 一一〇〇〓一一六一  
 神祇 雑六 一二六二〓一一八〇  
 釈教 一一八一〓一一九九  
 誹諧歌 一二〇〇〓一二二〇  
 と、いわば整然と並んでいる。そしてその夏部の終り(三三四)は、

六月の祓へをよめる 伊勢大輔  
 みなかみもあらぶる心あらし波も名越の祓しつれば  
 という歌である。ここには夏部の終りが△六月祓▽であるという意識がみられる。

さて、およそ右様な編集を行った勅撰集の最初は勿論、古今集であるが、そこには、

春歌上 一〓六八  
 春歌下 六九〓一三四  
 夏歌 一三五〓一六八  
 秋歌上 一六九〓二四八  
 秋歌下 二四九〓三二三  
 冬歌 三一四〓三四二  
 賀歌 三四三〓三六四  
 離別歌 三六五〓四〇五  
 旅歌 四〇六〓四二一  
 物名 四二二〓四六八  
 恋歌一 四六九〓五五一

六月祓 又をかし(渡部)

恋歌二 五五二〓六一五  
 恋歌三 六一六〓六七六  
 恋歌四 六七七〓七四六  
 恋歌五 七四七〓八二八  
 哀傷歌 八二九〓八六二  
 雑歌上 八六三〓九三二  
 雑歌下 九三三〓一〇〇〇  
 雑体 一〇〇一〓一〇一〇  
 誹諧歌 一〇一一〓一〇六八  
 大歌所御歌 一〇六九〓一〇八六  
 東歌 一〇八七〓一一一一  
 となっていて、夏歌部の最後は躬恒の歌で、  
 みな月のつごもりの日よめる  
 一六八 夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへ涼しき風やふくらむ  
 という、理知的な名歌である。  
 恋歌部に、  
 五〇一 恋せじと御手洗川にせし禊神はうけずぞなりにけらしも  
 とある。この「禊」は季節化されていない。逆には△六月祓▽には恋の要素も大きいわけで、「をかし」の種々相を含んで存在することが推測されよう。もともと伊勢物語に「神はうけずもなりにけるかな」とあるものである。

伊勢物語、四十七に「大幣の引く手あまたになりぬれば」「大幣と名にこそたてれ流れても」という歌があつて、これも次のように編集されている。

古今集 卷第十四 恋歌四  
 七〇六 ある女のなりひらの朝臣をとこさだめずありきすとお

もひて、よみてつかはしける よみ人しらず

おほぬさのひくてあまたになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

は、大系本頭注に「大祓に立てる、櫛に多くの幣を垂れたものを大幣と言い、式が終ると参列の人々がそれを引き寄せて身をなでてけがれを移す」とある。

七〇七 おほぬさと名にこそたてれながれてもつるによるせはありてふ物を

は頭注に「大幣は川へ流す定めになっている。」とある。

みられるように「おほぬさ」は恋歌に出てくる。六月祓として季節化されてはいない。

後撰集にいたって、夏歌の最後二首

二一五 六月祓へしに河原に罷り出でゝ月のおかきを見て鴨川のみな底すみててる月のゆきて見むとや夏祓へする

二一六 みな月二つありける年

棚機は天の河原をなゝかへり後のみそかを禊にはせよ

とある。この辺で夏歌の終りは「六月祓」に定着した。それも

「月のおかきを見て」だったり、「棚機」が詠み込まれたりしていて、ふらつきながら落ち着いてくる様子がある。ともに「読人

しらず」で、「六月祓」の情緒は、いわば庶民性から勅撰集に位置を占めることになった。

そして秋歌上(二一七)は、

俄にも風の涼しく成ぬるか秋立つ日とはむべもいひけり

と始まるが、これは「惟貞の親王の家の歌合に」とあるから、六月祓を置いて、「秋立つ」と発想されてくるのが、公的に、歌集的に承認されている様が推測できる。

拾遺和歌集には、

題知らず よみ人しらず

一三三 底清み流るゝ川のさやかにもはらふることを神はきかなむ

藤原長能

一三四 さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日はなごしのはらへ也けり

よみ人しらず

一三五 紅葉せば紅くなりなむ小倉山秋待つ程の名に杜ありけれ  
右大将定国の四十賀に内より屏風てうじて給ひけるに

忠岑

一三六 大荒木の森の下草しげりあひて深くも夏の成にけるかなとあって、後二者はなるほど夏の終りには違いないが、六月祓で夏部が終って、次は秋というわけではない。この六月祓と夏の果ては時に入れ替えることがある。

詞花和歌集には六月祓を詠んだ歌はない。

千載和歌集では、

百首の歌奉りける時 みな月の御祓をよめる

藤原季通朝臣

二二二 今日くれば麻の立枝にゆふかけて夏六月の祓へをぞする

皇太后宮大夫俊成

二二三 いつとても惜しくやはあらぬ年月を禊に捨つる夏の暮哉

読人しらず

二二四 御祓する川瀬にさ夜や更けぬらむかへる袂に秋風ぞ吹くとの様に「六月祓」で夏歌がしめくられる状態がはっきりしている。

新古今和歌集では、貫之の、

二八四 みそぎする河の瀬見ればから衣日も夕暮に波ぞたちける  
で終っている。「月次屏風」によっている。だから夏部八六月祓  
▽は殆んど形式化してしまった状態である。

とにかく、八代の勅撰集の中で、その位置を固定してくる六月  
祓は、後撰和歌集あたりからなのであるが、その後撰和歌集は天  
曆五年（西九五一）宣旨。十一世紀初めに成立した。この歌集が  
八巻の歌▽を中心に編集されたといわれているのもっともで、  
民間性の六月祓はそうしたところに姿を現わしたのであろう。散  
文に描かれた宮廷生活とは趣を異にしたところがある。

千載和歌集の成立は平安朝貴族の没落と平行する。そこに六月  
祓の具体性がでてる。貫之以後にも具体的な例が八代集を通し  
て一例しかないのも奇異ながら、千載集の「今日くれば麻の立枝  
にゆふかけて」は屏風絵的客観性ではない。大体今まで一例の  
「麻の立枝」もありはしなかったのである。

こうして、和泉式部の「麻の葉を切りに切りても」は、麻の枝  
条を刈り取ってくることであったことが知られる。そして和泉式  
部の場合は、六月祓の外形的儀式よりは心情についての、苦しい  
思いの祓いだったことが推測される。それは罪といったものより  
は、もっと別に成立した、分化した心情についてであった。

## 二

新勅撰和歌集には、

六月祓の心をよみ侍りける 後京極摂政前太政大臣

六月祓 又をかし（渡部）

一九〇 早き瀬の帰らぬ水に御祓してゆく年波のなかばをぞしる  
寛喜元年女御入内の屏風 前関白

一九一 吉野川かは浪早く御祓して志らゆふ花のかずまさるらし  
一九二 風そよぐならの小河の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりける  
の三首。この辺に到って面白いのは八六月祓▽という生活的な事  
実であるはずのものが、「六月祓の心」をよむという風に観念化  
され、内面化されていることである。また月次屏風を基盤にし  
て、絵が「夏のしるし」であるような受け取り方が定着してしま  
っている。そのために逆に、人間の抒情に於ては「御祓ぞ夏のし  
るしなりける」は案外あざやかな言挙げであつたろう。

続後撰和歌集では、

百首の歌奉りしとき、六月祓を 太宰権帥為経

二二五 夏暮るゝ神南備川のせをはやめ御祓にかくる浪の白ゆふ

おなじ心を 藤原隆信朝臣

二二六 御祓するいくしの志でに風過ぎて涼しくなりぬ六月の空

後京極摂政前太政大臣

二二七 みそぎ川浪のしらゆふ秋かけてはやくも過ぎる六月の空

皇太后宮大夫俊成

二二八 なる滝や西の河瀬にみそぎせむ岩越すなも秋や近きと

続古今和歌集には、

夏祓を 権中納言長雅

二八二 御祓河小夜更けがたに寄る波の返るや夏の別れなるらむ

従二位家隆

二八三 夏くれて流るゝあさのゆふは河たれ水上に御祓しつらむ

前中納言定家

二八四 飛鳥川ゆく瀬の波に御祓して早くぞ年のなかば過ぎぬる

続拾遺和歌集には、

建保四年内裏の百番の歌合に 前中納言定家

二一三 夏はつる御祓もちかき川風に岩波たかくかくるしらゆふ

西園寺入道前太政大臣

二一四 御祓する幣も取敢へず水無月の空に知られぬ秋風ぞふく  
とあるが、この辺りになるとともに六月祓を詠むよりは形式として、情性のように詠まれる。「岩波たかくかくるしらゆふ」は右の為経の歌「御祓にかくる浪のしらゆふ」に似ているし、「幣も取り敢へず」は続後撰、藤原信実の歌（四四五）にある。波と白木綿の配合の面白い屏風絵があったのであろう。

新後撰和歌集には、

題しらず 後九条内大臣

二四九 吉野川滝の岩浪木綿かけてふるさと人やみそぎしつらむ  
というのは先の新勅撰の歌に風景が似ているし、右に述べたこととも一連をなすようだ。

玉葉和歌集には、

六帖の題にて人々歌つかうまつりけるに、なごしのはらへ

従二位兼行

四四七 風わたる河せの浪の夏ばらへタぐれかけて袖ぞすゞしき  
四四八 夕されば麻の葉流るみよしのゝ滝つ川うちにて褌すらしも  
これで八吉野川は三度出てきたわけであるが、吉野川・岩浪・木綿・麻の葉は一つの画題であったのだろう。

続千載和歌集には、

前関白左大臣押小路

三三九 みそぎする夜はの河浪音更けて明けぬより吹く袖の秋風

昭訓門院春日

三四〇 わきて又涼しかりけり御手洗や御褌に更くる夜はの河風

宝治の百首の歌奉りける時、六月祓 冷泉太政大臣

三四一 底清き河瀬の水のあさの葉に白ゆふかけて御祓をぞする

百首の歌よみ侍りける中に 皇太后宮大夫俊成

三四二 水上に秋や立つらむ御祓河まだよひながら風のすゞしき

千五百番歌合に 後鳥羽院御製

三四三 御祓河瀬々の玉藻の水隠れてしられぬ秋や今宵立つらむ  
とのように並んでいる歌から六月祓の景色を作り上げてみると、「底清き河瀬の水のあさの葉に」では、麻の立枝は河瀬（水の流れ）に立てられたらしいこともあったらしいこと、その麻の枝は葉に「白ゆふかけて」は波と木綿が共に触れている様子が浮かび上ってくる。

例えば先の「吉野川滝つ岩浪木綿かけて」は一・二句が「木綿」への序であったにしても、波の「ゆふ」と「木綿かけて」の「木綿」は同じ場所にあった方が合理的であろう。このような景色を作り上げてみると、六月祓の歌への解釈の視点がでてるようである。

続後拾遺和歌集には、

六月祓をよませ給うける 新院御製

二三九 御祓河流れて早く過ぐる日の今日六月は夜も更けにけりとあつて、これは八六月祓の心Vをよんだもので、慣習性に侵略された心情である。

風雅和歌集には、

文保三年後宇陀院に奉りける百首の歌の中に

権中納言公雄

四三三 御祓する河瀬の浪の白ゆふは秋をかけてぞ涼しかりける

六月祓を 円光院入道前関白太政大臣

四三四 御祓するゆくせの波もさ夜ふけて秋風近し賀茂の川みづ  
順徳院御歌

四三五 湊川夏の行くては知らねども流れて早き瀬々のゆふしで  
とみられる六月祓歌はもう八秋▽を先取りするように詠まれている。六月祓を詠めば八秋▽であるのは歌の抒情の約束であった。六月祓への情感は殆んどなくなっていて、その故にまた歌は具體的、事実のようになっていよう。

「御祓する河瀬の浪の白ゆふ」はやはり、八浪の白ゆふ▽でもあろうが、浪に八白木綿▽がまじっている様子なのであろう。だからそれと「流れて早き瀬々のゆふしで」は関係があるだろう。もつとも麻の枝条にかけた木綿しでは最後は川に流したものであろうから、必ずしも水中に立てられていた故に、浪と木綿がまじったわけでもないだろう。絵にはそんな景色が風雅だったのであろうが、歌を詠む方も生活的なりアルさは持っていない。

新千載和歌集には、

題知らず 伏見院御製

三〇五 まだきより波の柵かけてけりみそぎ待つ間の賀茂の川風  
元弘三年、立后の四尺屏風に、六月祓する所

後円光院前関白左大臣

三〇六 御祓川清き流れにうつすなり奈良の都のふるきためしを  
文保の百首の歌奉りし時 前大納言為定

三〇七 御手洗やみそぎにながす大幣の遂によるせは秋風ぞ吹く  
宝治二年百首の歌奉りける時、六月祓

皇太后宮大夫俊成女

三〇八 御祓するあさの葉末のなびくより人の心にかよふ秋かぜ

六月祓 又をかし（渡部）

と色んな歌があつて、「奈良の都のふるきためし」がほかに広がっていく様もあり、「まだきより波の柵かけてけり」は麻の枝条が波の柵となっていた場合の様子を示している。俊成女は「あさの葉末のなびくより」人の心には秋風が吹くというあの文学の伝統が定着している。

新拾遺和歌集には、

和泉式部

三〇五 今日又しのにをりはへ祓してあさの露散るせみの羽衣  
百首の歌奉りし時、夏祓 藤原行輔朝臣

三〇六 よるせなき身をこそ啣て思ふ事なほ大幣に夏はらへして  
進子内親王

三〇七 大幣やあさの木綿しで打ち靡きみそぎ涼しき賀茂の川風  
前内大臣実

三〇八 浪かくる袂もすゞし吉野川みそぎにやがて秋や来ぬらむ  
文保の百首の歌の中に 後西園寺入道前太政大臣

三〇九 今日しはや帰るさ涼し御祓川ゆふ波かけて秋や立つらむ  
とある中で、和泉式部はやはり「しのにをりはへ」て祓をする麻の露を面白く詠んでいる。また「大幣やあさの木綿し」とあるので、あの、古今・伊勢以来言ってきた大幣は八あさの木綿しで▽であったことが判る。また「浪かくる袂もすゞし」というから、袂を濡らしたこともあるらしい。そして「帰るさ」の気持も詠まれている。

新後拾遺和歌集には、

貞和二年百首の歌奉りける時、等持院贈左大臣

二七九 難波人御祓すらしも夏かりの芦の一夜にあきをへだてゝ  
百首の歌奉りし時、六月祓 権大納言為遠

二八〇 みたらしや誰が御祓とも白木綿の知らず流るる夏の暮かな

入道二品親王尊道

二八一 みたらしや引く手も今日は大幣の幾瀬に流す御祓なるらむ

夏の歌の中に 前大納言資名

二八二 御祓川年も今宵の中空に更くるをあきとかぜぞすゞしき  
延文の百首の歌奉りける時、夏祓 入道二品親王覚譽

二八三 御祓してかへさ夜深き河波の秋にかゝれる音のすゞしき  
同じ心を 左京大夫顯輔

二八四 河の瀬に生ふる玉藻の行く水になびきてもする夏祓かな  
新続古今和歌集には、

文治六年、女御入内の屏風に、河のほとりに六月祓したる所

皇太后宮大夫俊成

三四一 君がため今日の御祓に泉かは万代すめといのりつるかな  
前中納言定家

三四二 御祓してむすぶ河浪年ふとも幾世すむべき水のながれぞ  
夏祓を詠める 前大僧正果守

三四三 里人は今宵越ゆてふ三輪川の清きながれに御祓すらしも  
千五百番歌合に 土御門内大臣

三四四 みな月の今日呉竹のよをりにぞ君が千歳の数ほ添へける  
貞和の百首の歌めされけるついでに 光嚴院御製

三四五 御祓川ふけ行く浪の涼しきはあすの秋こそ先だちぬらし  
建保四年、内裏の歌合に 前大納言経通

三四九 たがみそぎ白木綿なみの竜田川あかつきかけて通ふ秋風  
では、泉川、三輪川、竜田川と一挙に川の種類がふえている。最

後の歌に「白木綿なみの竜田川」とあるのは「白木綿」と「ゆふなみ」が重なっている。

以上がいわゆる二十一代集の歌にみえる八六月祓である。屏風絵や歌合によって、形式化している。その故にこそ風雅なのであろう。文化に於て実生活や呪術が風雅であることはない。最後に新葉和歌集を、

読人しらず

二四六 たがみそぎ夕浪かけて川のせの麻の葉ながし風ぞ涼しき

三

以下は私家集などを挙げる。

長秋詠藻上 夏歌十首

いつとても惜くやは非ぬ年月を御禊に捨る夏の暮哉  
夏歌 六月祓

思ふ事皆尽きねとて御禊する川瀬の波も袖濡しけり  
長秋詠藻下 千五百番歌合 夏十五首

鳴滝や西の河瀬に御禊せむ岩こす波も秋や近きと  
と詠まれている中、「思ふ事皆尽きねとて」は面白い。これは恋歌である。

六月 河辺に六月はらへしたる所

君がため今日の禊にいづみ川万代すめと祈りつる哉  
は六月禊を儀礼的に使っている。

秋篠月清集二 西洞隠士百首 夏

早き瀬の帰らぬ水に御禊して行年波の半ばをぞ知る。



院初度御百首 夏

御禊川波のしらゆふ秋かけて早くぞ過ぐる六月の空  
院第三度百首 夏

織女の天の川原に恋せじと秋を迎ふる御禊すらしも  
とある最後の歌は八織女の恋／＼まで取り込んでいる。それだけ現実性からは離れている。

秋篠月清集四 河辺に六月祓したる所

夏の日を兼て御禊にすつる哉あすこそ秋の初と思に  
拾玉集巻第一 百首和歌 荒和祓

昔より命のおてふ例とてなごしの祓せぬひとぞなき  
日吉百首和歌 夏十首

夏祓更け行く空を眺むれば頓て身にしむさほの川風  
御裳濯百首 夏十首

山深み岸の小萩も咲にけり今日や名越の祓するらむ  
拾玉集巻第二 夏 荒和祓

みそぎする立田川原の河風にまだき秋立つ夕暮の空  
詠百首和歌 夏 家々夏祓

孰くにか荒ぶる神は宿るらむ今日祓せぬ宿し無ければ  
宇治山百首

月を見る身の浮雲も六月の祓にはるゝ秋のみぞくる  
勅句百首 夏二十首

たてならぶいくらのしでの川風に秋をも忘れる夏祓かな  
拾玉集巻第四 詠百首和歌 夏十五首

夏はつる今日の禊の菅拔をこえてや秋の風は立らむ  
夏

嬉しくもつみ水無月の今宵かな千年の命のぶる祓に

六月祓 又をかし（渡部）

拾玉集巻第六 詠百首和歌 夏二十首

夏果る今日の祓へのすがぎぬを超てや秋に成むとすらむ  
秀歌百首草 夏十五首

あすを秋と思ふ禊の河風にかねてこぼるゝ袖の露哉  
拾玉集巻第七 緇素歌合十首 夏 立田川

たつた川いくしのしでに波こえて秋風通ふ夕暮の空  
副詠、処々六月祓

さもこそは川の瀬毎に河祓へ井堰にも又波の菅ぬき  
六月祓

去年の今日のあすより後の一年の罪なき月の祓なりけり  
との様に拾玉集は六月祓を多く詠んでいる。その中に「菅拔」と

いうのが出てくる。これは「茅の輪」（すぐで作った輪）で、これをくぐり、戸口にかけ、また首にもかけた、という。だからこれは叙上の「木綿しで」とは形状も情趣も異なる。麻が全くでてこないのも特徴である。

山家和歌集上 六月祓

御禊して幣とり流す河の瀬に頓て秋めく風ぞ涼しき  
には「幣をとり流す」とあって、禊をして、その呪具を川に流したことが推測される。

拾遺愚草上 皇后宮大夫百首 夏十首

御禊河からぬ浅茅の末をさへ皆一かたに風ぞ靡かす  
（詠百首和歌） 夏十五首 荒和祓

御禊して年を半と数ふれば秋よりさきに物ぞ悲しき  
（詠百首和歌） 夏十五首 荒和祓

御禊すと暫し人なす麻の葉も思へば同じ仮初の世を  
（仙洞） 夏十五首

誰が御禊同じ浅茅のゆふ懸てまづ打靡く賀茂の河風

(春日) 夏十五首

飛鳥川ゆくせの波に御禊して早くぞ年の半過ぎぬる

拾遺愚草中 院五十首 夏

夏はつる扇に露も置きそめて御禊涼しき賀茂の川風

女御入内御屏風歌 河辺に六月祓したる所

御禊してむすぶ川波としふとも幾世すむべき水の流ぞ

六月祓

夏衣おりはへてはす川波を御禊に添る瀬々のゆふしで

拾遺愚草下

建保四年潤六月内裏歌合 夏

夏はつる御禊に近き川かげに岩波高くかゝる白木綿

拾遺愚草員外雑歌上 夏二十首

まだきより麻の立枝に秋かけて袂すゞしき夏祓へ哉

拾遺愚草員外雑歌下 雙蓬霜色先<sup>レ</sup>秋変、地芥恩余老匹抛

御禊する麻の立葉は宿ごとに刈る程もなく抛てつ也

詠百首和歌 荒和祓

御禊川流すあさぢを吹く風に神の心や靡きはつらむ

と拾遺愚草にも六月祓の歌は多い。その中で

御禊河からぬ浅茅の末をさへ

誰が御禊同じ浅茅のゆふ懸て

御禊川流すあさぢを吹く風に

と見える八浅茅<sup>✓</sup>は、「同じ浅茅のゆふ懸て」とあるのからみれば「ゆふ」に茅浅を使ったものであろうか。

また「御禊すと暫し人なす麻の葉も」という表現には大変な特徴がある。「御禊する麻の立葉は宿ごとに刈る程もなく抛てつ

也」にそれがよく現われている。「暫し人なす麻の葉も」「刈る程もなく抛てつ也」という具合である。拾遺愚草の見る目だけが鮮かに異なる。八禊<sup>✓</sup>には麻の立葉<sup>||</sup>葉のついた枝条を使ったらしいことが推測される。それに、八ゆふ<sup>✓</sup>八浅茅<sup>✓</sup>八荒たへ<sup>✓</sup>などをつけたものか。さうした呪具は最後に全部流されたのだろう。

壬二集

上 百首和歌 堀河百首 荒和祓

御禊する川辺の松よ吹く風に幾夜千年の秋を迎へむ

詠百首和歌 文治三年 夏十首

皆人の厭ひけりとは夏の日を御禊に捨る暮ぞ知らるゝ

詠百首和歌 文治三年十一月 夏十五首

影清き河辺の楸風こえて秋をかけたる御禊をぞする

上之下 詠二百首和歌 六月祓

御禊川ゆふかけてする麻の葉の直き心を伸やうく覧

明日よりの秋の心のいかならむ思は捨つよはの御禊に

百首和歌 為家卿家会 夏十首

御禊する今日だに涼し吹寄せむ波にや秋の飛鳥川風

百首和歌 擬作 六月祓

御禊川今宵ばかりの六月を猶厭ひても祓ひへるかな

詠百首和歌 九条前内大臣 晩夏

夏くれば知やおきなるわが川に今年も有て御禊しつ共

五十首和歌 老若歌合 夏

桜麻のをふの下露いかならむ御禊になりぬ六月の空

五十首和歌 日吉奉納 夏

神人や濱の御禊に出でぬらむ榎の戸河も音ぞ涼しき

寛喜元年女御入内御屏風和歌 六月祓

風そよぐならの小川の夕暮は御禊ぞ夏の印なりける  
住吉三十首和歌 夏五首

六月の今日のさかひに御禊して齡を延る千代の神人

四季之部 夏部 荒和祓

荒和の神のあらきを和げてあさの夕に御禊をぞする

夏の歌とて

夏くれば流るゝ麻のゆふは川たれ水上に御禊しつらむ

古今の一句をこめて夏の歌詠み侍りに

こめやとも今は待たれず郭公よもの御禊の六月の空

歌仙家集は省略して、諸家集の中、「金槐和歌集」の例を、都  
から離れた歌集として参考に見てみよう。

夏 夏の暮によめる

御禊する河瀬に暮ぬ夏の日の入相の鐘の其声により

夏はただ今宵ばかりと思ひねの夢路に涼し秋の初風

とあって、次が「秋」だから少し異趣である。

六月祓

我国の大和島根の神たちを今日の御禊に手向つる哉

あだ人のあだに有身のあだ事をけふ六月の祓へすてつと云

夏の暮によめる

禊する萱が軒ばに引しでのまつはれつきて夏を留めむ

兼好法師集には六月祓の歌はない。しかし縷述の情緒の伝統が  
「六月祓又をかし」と書かせたことは推測してよいだろう。ただ  
兼好の表現構造と歌の持った形式の構造が似ていなかったのであ  
ろう。歌はとにかくにも八六月祓の様子を詠むのであるが兼

六月祓 又をかし（渡部）

好は六月祓の伝統・情緒を全体的に、「折節の移りかはること、  
ものごとく哀れなれ。」の中で、対象的に八をかしと捉えてい  
るわけである。

神社の家系に生まれては、祓へは歌にはならなかったのかも知  
れない。それは動作であって詠嘆ではありえなかったのだろう  
か。しかし左兵衛佐でもあったとすれば、宮廷や官人の風雅の伝  
統は自ら受けとめる環境にあった。対象化して全体的にみればや  
はり六月祓は風情のあるものであったろう。

#### 四

古今六帖に、第一帖、名越の祓として

水無月の名越の祓へする人は千年の命延ぶといふ也

大幣の河の瀬毎に流れても千年の夏は夏みそぎせむ

禊ぎつゝ思ふことをぞ祈つる八百万代の神のまに／＼（伊勢）

此川に祓へて流す言の葉は波の花にぞ類ふべらなる（貫之）

御禊する河の瀬見れば唐衣日も夕暮に波ぞたちける（貫之）

空見えて流るゝ川のさやかにも祓ふることを神は聞かなむ（躬恒）

みゝと川聞けば同く大麻にかく祓ふるを神は聞くらむ（躬恒）

年なかに我が歎は成ぬれば禊ぐ共世に失せじとぞ思（伊勢）

君により事の茂さに故郷の飛鳥の河に御禊しにゆく

御禊する櫓の小川の河風に祈りぞ渡る下に絶えじと

立田川滝の瀬きりに祓へつゝいはふ心は君が為とぞ（八代王女）

（八代王女）

ねぎ言も聞で荒ぶる神だにも今日の夏越の祓と云也 (順)  
と並んでいて、その後に「夏のはて」四首があり、次が「秋立つ日」となっている。

千五百番歌合では、

五百十一番、二番、三番、四番、五番、六番、七番、八番、九番、二十番、廿一番、廿二番、廿三番、廿四番、廿五番が、八秋Vの前の歌であるが、最後の廿二、三、四、五は「御祓」と「夏のはて」の混合のようになっている。

こうして八六月祓Vは歌の季題のようになって、麻の呪術性は緑の葉の情緒性に変ってきた。なるほど「六月祓またをかし」なのである。文学は遂に呪術を凌駕してきたのであろうか。

さて何故八麻Vなのかについては明瞭ではないが、天武紀五年八月に、

(十六日) 詔して曰く、「四方に大解除せむ。用るむ物は、国別に国造輪せ。稜柱は馬一匹・布一常。以外は郡司。各刀一口・鹿皮一張・鏝一口・刀子一口・鎌一口・矢一具・稻一束。且戸毎に、麻一条」とある。「戸毎に麻一条」というのは繊維の麻である文字通り八ハラへVの為に支払ったのである。

これは養老神祇令にも「戸別麻一条」とあって、麻が祓物として公的性質、一般認識の基礎をなしたであろうことを推測される。そして他の祓物と比較してみると、麻も国家的・公的需用物であり、それが戸毎に生産可能であったことが第一の理由であったことも推測できる。

だから麻は本来的な呪具なのではないだろう。十年七月三十日にも「天下に令して、悉に大解除せしむ。」とある。この時も麻

の繊維であつたろう。

六月祓が八麻の枝条Vであるのは季節にもよるだろうし、民家ではそれぞれ公的需用という意味が消滅している故でもある。神道的性格が薄れ、麻は布として八調Vの方に廻った。祓へが八麻Vに意識をとどめて、麻の枝条に呪性を残したのかも知れない。

歴史・物語と法律は一緒に出来てきたのであろうか。古事記が成立してくると、罪ハハラへが成立してくるのは似ている。

そして文学であるものは、決して文学ではあり得ないものからの距離の度合であるから、麻は法律や歴史・物語の世界を去る度合で文学になってきた。

(昭和五十六年十月三十一日受理)